

昭和63年度

教師と生徒の信頼関係を築く学校教育相談のあり方

～非行化傾向を持つ生徒とのかかわりについての一考察～

川崎市総合教育センターカウンセラー研修員

教師と生徒の信頼関係を築く学校教育相談のあり方

— 非行化傾向を持つ生徒とのかかわりについての一考察 —

見 富 信 義

はじめに

科学技術の進歩が著しい現在、いろいろな情報が日常生活にあふれている。学校教育現場の中にも、コンピューターがしだいに導入されつつあり、教育の能率化をはかるための研究がいろいろ試みられている。物質的にも、欲しい物はすぐ手に入り、豊かに生活することができる状態にある。

しかし、その反面、子供達は、情報が入り乱れる中で複雑化した社会にうまく適応できず、また、容易に満足した生活が送れる環境のため、精神的にひ弱になる傾向が見られる。家庭においても、それぞれの家庭の価値感が多様になり、地域としての教育力が育ちにくい状況にある。このような中で生徒指導上の問題は、窃盗などの初発型非行の増加、深夜徘徊の増加、いじめの陰湿化、女子非行の増加、登校拒否の増加、等が叫ばれている。

学校現場においても、これからの教育のあり方を再度見直し、教師としての立場で子供達とどのようにかかわったらよいかを考える必要に迫られている。特に、教師と生徒の信頼関係は、教育の原点である。非行化傾向生徒を含めた生徒と教師の信頼関係はどのようにあるべきかを学校教育相談という立場で考えてみたい。その関係づくりに大きな役割を果たすのが、受容的、共感的、かつ自己一致した教師の教育相談の態度である。このような態度は、教育相談の場面のみでなく、生徒とふれあうあらゆる場面において必要とされるものである。

岡山県教育センターが開発した子供の立場からみた教師と生徒の人間関係調査(HRT)を基に、本校における生徒の実態を調査し、非行化傾向生徒を含め、教師と生徒の信頼関係を築くには、教師がどうあればよいかを追求してみた。このことは、本校のみにとどまることなく、生徒にかかるすべての教師にとって信頼関係を築く上で意味のあることではないかと考える。

I 教育相談のむずかしさ

カウンセラー研修員として定期的に一年間の研修を受け、その間、受理会議、教育相談実習コース、事例会議等に参加し、また、実際に相談面接を行い、研修を続けてきた。その中で、教育相談について感じたことは、次のことである。

- 受理会議の報告の中で、扱っている内容が多岐にわたるものであると感じるとともに、幅広く、深い専門的知識なくして対応できるものではないことをあらためて感じた。
- 相談対象が、幼稚園児から高校生まで広く、特に高校生になってからの相談が増加している現状にふれ、「ある程度成長したら大丈夫だ」という従来の自分の考え方の誤りに気がついた。
- 子供の行動上の問題を診断する際、受理会議等の中に精神科医がメンバーに入っていたことは、

専門的な知見が得られ、大きな価値があることを知った。

- 親が変容することにより子供が変容していくという報告を耳にするにつけ、親の態度、考え方が子供に与える影響が非常に大きいことを痛切に感じた。
- 教育相談実習コースのカウンセリング演習は、自分自身をいやが上にも見直さねばならず、苦痛を感じたが、そのことが自分を高めるうえで大切なことであると感じるようになった。
- 実際の相談面接を通して、親は試行錯誤を繰り返しながら、いろいろ悩み、考え、様々な試みをしていることを知った。その中で効果があがらないと、あせり、不安等の感情的な動揺がおこり、冷静に自他を見つめるゆとりが少なくなっていると感じた。
- 来談者の感情を受容するためには、50分の相談時間は長い時間ではなく、短い時間であることを感じた。
- 相談の中で来談者の言いまわし、間のとり方、沈黙の中にも、その人のその状況での気持ちがこめられており、話をしている時の表情も、相手の気持ちを理解するために大切であった。相手を受容し、共感的に理解することは、非常にデリケートで精神的なエネルギーを必要とすることを痛切に感じた。

II 研究のねらい

1. 生徒一人ひとりがどのように教師を見、とらえているかを実態調査から明らかにする。
2. 非行化傾向をもつ生徒と、学校に適応していると思われる一般の生徒との間では、教師に対する見方、とらえ方にどのような差があるかを明らかにする。
3. 学校教育現場での生徒のかかわりの実践と実態調査とから、信頼関係を築き、一人ひとりを生かすための効果的なかかわり方を探る。

III 研究の内容と方法

1. 調査内容

(1) 岡山県教育センターが開発した「子供の立場からみた教師と生徒の人間関係調査(HRT略称)」による。〔表-1〕

(2) 面接法による調査（非行化傾向生徒）

2. HRTのねらい

この調査は、教師の教育相談的態度（「受容」「自己一致」「共感的理解」）の測定をねらいとする。

(1) 受容について

生徒が、非社会的行動や反社会的行動など、いろいろな感情に基づいた行動をとっても、非難、叱責、命令、拒否、無視、等の態度をとるのではなく、あるがままの姿、感情を素直に認め、それを受け入れて一人のかけがえのない人間として尊重する態度。

(2) 自己一致について

教師自身の中にある自然な、素直な感情、気持ちを率直に生徒たちの前に出し、共に考えていこうとする在り方が自己一致した態度である。

(3) 共感的理解について

教師の意図するものとは異なっている、生徒の言葉や行動の底にある感情を、その生徒の身になって感じとり、理解すること。

3. 調査の実施

(1) 調査月日 昭和63年10月～12月

(2) 調査対象

川崎市立御幸中学校、第1～3学年、各学級3学級ずつ合計9学級377名、非行化傾向をもつ生徒、男6名、女3名、計9名。

(3) 調査実施方法

- 調査用紙の配布し、男女の性別を○で記入させる。
- 教師が調査用紙の「調査のめあて、記入のしかた」を読む。
- 質問項目は原則として生徒が読み記入させる。
- 生徒が回答する際に対象とする「先生」とは、教師一般ではなく「困った時、相談してみたい先生」と条件づけ、学級担任や教科担任を一人頭におき回答するよう事前に説明して実施する。

(4) 調査の実際

教師に対して生徒がプラスのイメージ（人間関係がよい状態……左側の調査項目が1, 3, 5, 6, 7, 9, 10, 12, 13, 17, 18）を持つものを+2（多い）と+1（やや多い）としマイナスイメージ（人間関係がよくない状態……左側の調査項目が2, 4, 8, 11, 14, 15, 16）を持つものを-2（多い）と-1（やや多い）とし、どちらともいえないものを0として調査項目別平均点、態度別平均点を算出した。

IV 結果と考察

1. 本校の生徒について

本校の全校生徒の平均点、非行化傾向生徒の平均点、岡山県の中学生の平均点をまとめると、図-1のようになる。

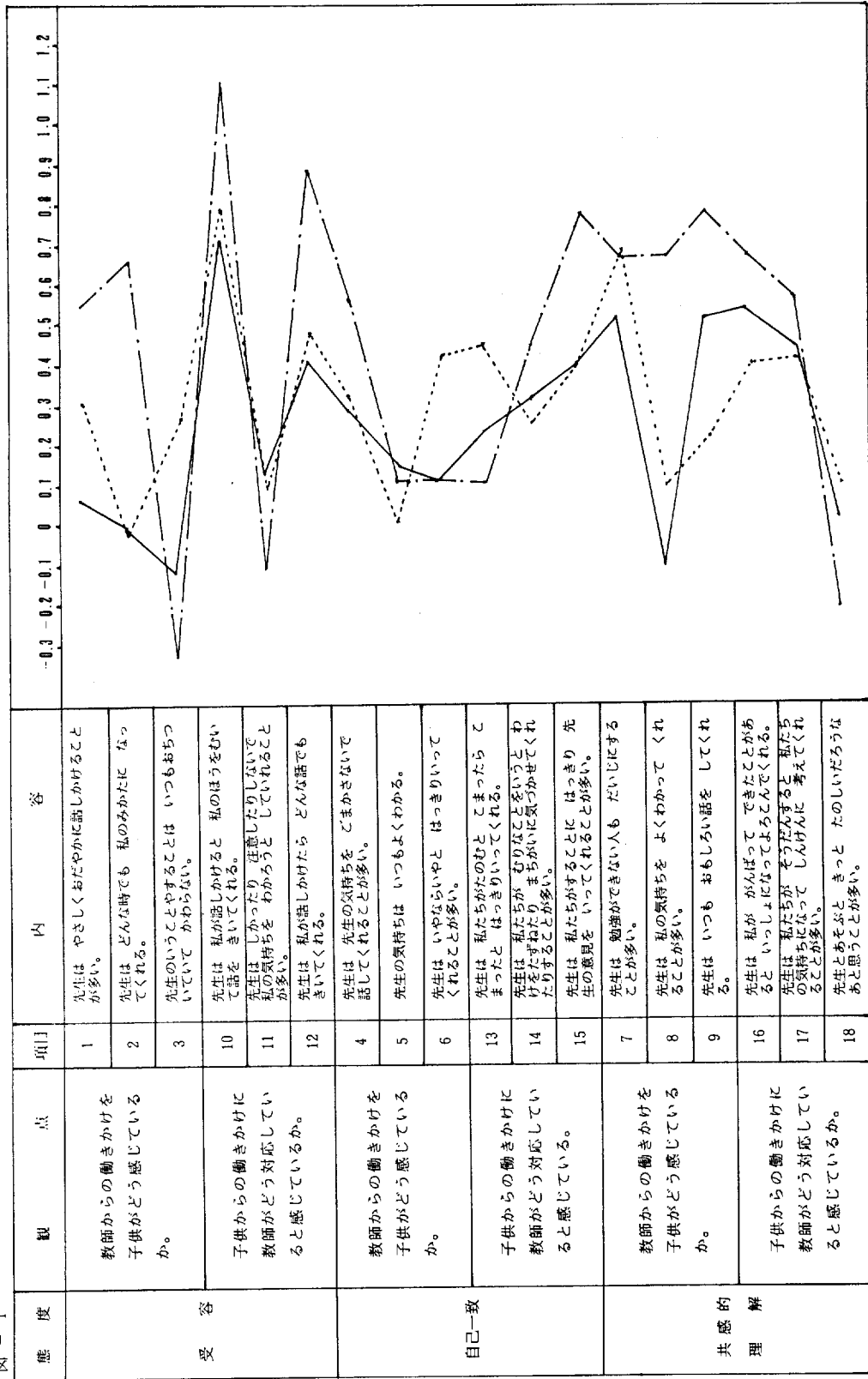
本校生徒と岡山県の中学生を比較すると、本校の教師の方が、いやなものをはっきり言い表わさず、困った事があっても素直に表現しない傾向がある。（項目6, 13）また、おだやかに話しかけることやいつも落ちついてわからない態度が苦手である。（項目1, 3）これは、生徒指導上の問題を多くかかえ、なかなかゆとりがもてない本校の事情によるものではないかと思われる。逆に共感的理解の態度は岡山県より本校の方が良い。（項目9, 16）

図-1から教師一般に言えることは、生徒を肯定的に受けとめようとし、わけへだてなく皆を大切にする姿勢が強いといえる。（項目7, 10）しかし、生徒の気持ちをよくわかっているわけではない。（項目8, 11）生徒の気持ちをわかろうとしても機会がないのか、機会があっても教師の方で気持ちをとらえることがうまくできないのか、理由はいろいろ考えられるが、いずれにしても、カウンセリング的なかかわりをいっそう重要視しなければならないと思われる。

2. 非行化傾向生徒について

本校の全校平均と非行化傾向生徒の平均を比較すると、非行化傾向生徒の調査数が少なく信頼性

図 - 1



— 本校全校生徒平均 — — — 非行化傾向生徒平均 — — — 岡山県中学生平均

は低いかもしれないが、次のことが言える。

教師は非行化傾向生徒に対し、一般生徒に対するよりもよく注目し気持ちをわかろうと努力をし、真剣になって考え合っていることがうかがえる。また、生徒が話しかけるとしっかり聞こうとする姿勢が、一般の生徒より強くあらわれている。(項目2, 10, 12)このことは教師の手がかかるだけに、何とかしようと積極的に教師がかかわろうとする姿勢の表れとも解釈できる。調査前は、「非行化傾向の生徒は、一般の生徒より教師を受け入れていないのではないか」と予想をたてていたが、まったく逆の結果が表れた。

受容の態度で、いつも言動がわからない姿勢は一般生徒より低い。(項目3, 11)このことは生徒を注意したり、説諭したりするかかわりが多いためと考えられる。非行化傾向生徒に対する教師の姿勢として、生徒の気持ちをよくつかみ、受け入れる姿勢がいつも安定していることが大切だと思われる。カウンセリングマインドを生かした生徒指導の対応が必要であると考えられる。

V まとめと今後の課題

調査結果から、教師は、子供からの働きかけに対して、受容し、共感的に理解しようと努力する姿勢がうかがうことができた。しかし、生徒は気持ちを充分にわかってくれているという印象をあまり持っていない。教師は、生徒に話しかけられれば耳をかたむけるが、本当の気持ちをじっくり聞いてやるのが十分にできていないように思われる。

教師と生徒の信頼関係を築くためには、表面的なかかわりで終わるのではなく、もっとじっくり腰をすえてかかわることが大切なことではないかと思う。今後、私も含めて、生徒の気持ちをとらえるカウンセリング的なかかわりの技術をさらに深く身につけていきたい。

VI おわりに

一年間の研修を通して、生徒指導、教育相談を新たな視点からとらえ直すことができ、教育相談のむずかしさを改めて感じた。人の気持ちを受容し、共感的に理解することは、並大抵のことではないことを知った。そして、今までの自分の生徒指導を振り返ると、生徒のかかわりで未熟であった自分が改めて見えて来た。いろいろな問題を抱えた子供達に対して、じっくり時間をかけ、素直な気持ちでかかわりあい、お互いの存在を認める中での信頼関係を大切にしていきたいと考えている。

最後に、この研修を行なうにあたって、ご指導、ご助言下さいました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

・参考文献

杉山嘉弘・小坂光一・剣持雅久「授業における生徒との人間関係に関する研究」岡山県教育センター、研究紀要第105号 1985年

・指導助言者

川崎市総合教育センター 第四研究室 指導主事 本間千尋